

令和2年度 学校評価報告書【国立市立国立第八小学校】

| 学校教育目標 | | よく考え、進んで行動する子ども 仲良く助け合い、よく働く子ども 健康でたくましい子ども | | | 重点目標 | よく考え、進んで行動する子ども | | | |
|-----------------|-------------------|---|---|--|--|---|--|---|--|
| 教育目標 | 中期的目標 | 短期的目標 | 具体的な取組 | | | 分析 | 改善策 | 令和2年度の学校関係者評価 | |
| | | | 児童による評価 | 保護者による評価 | 学校の自己評価 | | | | |
| よく考え、進んで行動する子ども | 子どもの学びを味わえる学校 | どの子ども分かる、どの子ども楽しんで授業を目指します | <ul style="list-style-type: none"> 授業のユニバーサルデザイン化(ICT機器や教材の工夫を通した可視化)を図り、分かる授業を目指す。 個に応じた指導の工夫を教員間で情報共有し、日々の指導に活かす。 | <ul style="list-style-type: none"> 授業で分かったことはありますか。肯定的 95.4% 授業は楽しいですか。肯定的 92.4% | <ul style="list-style-type: none"> 学校はどの子どもにも分かる授業作りに取り組んでいますか。肯定的 80.3% | <ul style="list-style-type: none"> 授業のユニバーサルデザイン化(ICT機器や教材の工夫を通した可視化)を図り、分かる授業づくりに取り組んできましたか。肯定的 100% 個に応じた指導の工夫を教員間で情報共有し、日々の指導に活かしてきましたか。肯定的 90.9% | <ul style="list-style-type: none"> 90%以上の児童が「授業は楽しい」と肯定的に捉えている。 80%以上の保護者が「分かる授業づくりに取り組んでいる」と肯定的に捉えている。 以上の結果は、100%の教員が授業のユニバーサルデザイン化に取り組んでいたり、90%を超える教員が個に応じた指導の工夫に取り組んできたためと考えられる。 | <ul style="list-style-type: none"> 支援に関わる教職員や関係諸機関と連携を図り、学習をマイナスに捉えている児童を支援する。 繰り返し学ぶことができるよう、復習や振り返りの時間を確保する。 教員の実践を本校の財産として蓄積し、多くの単元でユニバーサルデザイン化を図ることができるように進める。 | <ul style="list-style-type: none"> 復習や振り返りの方法を具体的に考えてほしい。一律に行う方法と個別に設定する方法があると思うが、子供たちがやらされているという感覚ではなく自主的に取り組めるようにしてほしい。 ユニバーサルデザイン化について、どの子ども学びに向かえるよう、一人台タブレットなど活用していくのはよい。 |
| | | 主体的、対話的で深い学びの視点に立った授業改善を進めます | <ul style="list-style-type: none"> 校内研究「自ら考察し、表現する力を育成する算数科授業の創造～協働学習を活かした指導方法と評価方法の開発～」の取組を通して、授業力の向上に努める。 自発的に教員が他の教員に授業を公開し、相互に授業力向上に努める。 児童が主体的、対話的で深い学びを実現できるよう、様々なツールを活用して児童の力を伸ばす。 | <ul style="list-style-type: none"> 算数の授業で、最後まで解こうとあきらめなかったり、友達と力を合わせて問題で悩んだりしたことがありますか。肯定的 92.7% | <ul style="list-style-type: none"> 学校は子供たちがすすんで学んだり、対話などを通して学びを深めようとしていたりする授業作りに取り組んでいると感じますか。肯定的 85.5% | <ul style="list-style-type: none"> 校内研究を通して、授業力の向上に努めましたか。肯定的 100% 授業を公開し、相互に授業力向上に努めましたか。肯定的 72.8% 児童が主体的、対話的で深い学びを実現できるよう、様々なツールを活用しましたか。肯定的 81.8% | <ul style="list-style-type: none"> 児童の約90%が最後まで解く、友達と力を合わせて問題を解くことを肯定的に捉えている。 保護者の80%以上が、主体的、対話的で深い学びを実現しようとしていると肯定的に捉えている。 以上のことは、教員が校内研究をはじめ、日々の実践に向上心をもって取り組んでいるからと言える。 | <ul style="list-style-type: none"> 校内研究を通して、学習問題の設定や学習の振り返りの指導、協働的に学ぶ方法の充実を図る。 一人1台のタブレット、関連図書、思考ツール等を活用した授業づくりを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> 研究授業を学年ごとに1回ずつ行ったり、事前に模擬授業を行っていることは指導力を上げていくことにつながると思う。 一人1台タブレットについて、ミライシードというソフトがあって活用が期待できる。どの先生も使えるよう研修を積んでほしい。 |
| | | 基礎的、基本的な内容の確実な定着を図ります | <ul style="list-style-type: none"> 習熟度別学習(第3学年以上)を通して、児童一人一人の状況を適切に把握し、実態に応じた指導を行い、基礎的、基本的な内容の定着を図る。 家庭学習(宿題)課題を毎日出し、基礎的、基本的な内容の定着の補助的な取組とする。 東京ベシックドリルを活用し、基礎的、基本的な内容の定着状況を把握する。 繰り返しの指導(授業開始時に既習内容を振り返る等)を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ベシックドリルを活用し、前学年までに配当されている算数の問題の正答率より評価する。(3年生以上) 3年 49.2(1学期)→66.1(2学期) 4年 65.6(1学期)→78.5(2学期) 5年 70.4(1学期)→71.3(2学期) 3年 47.8(1学期)→62.4(2学期) | <ul style="list-style-type: none"> 学校は、子供たちに基礎的・基本的な内容の定着を図っていると思いますか。未実施 | <ul style="list-style-type: none"> 児童一人一人の状況を適切に把握し、実態に応じた指導を行い、基礎的、基本的な内容の定着を図ってきましたか。肯定的 100% 繰り返しの指導を行ってきましたか。肯定的 100% | <ul style="list-style-type: none"> ベシックドリルの結果においては、1学期に実施したもののより2学期に実施したものが、どの学年も正答率が上昇した。 全ての教員が個に応じた指導を心掛け、繰り返しの指導を重視したことが関係していると捉えられる。 | <ul style="list-style-type: none"> 児童の実態に合わせ、前時の学習や前学年までの系統性のある既習事項を振り返る時間を確保する。 基礎的・基本的な内容を必然性をもって習得できるような学習課題を設定した授業づくりをする。 一人1台のタブレットPCの導入に伴い、知識・技能の定着に効果的な学習方法を開発する。 | <ul style="list-style-type: none"> 振り返りを毎時間の学習に位置付けていることは、基礎・基本的な内容を定着させるうえで効果的だと思う。 ベシックドリルの結果を指標の一つにしていくことは有効なので、引き続き毎学期行ってほしい。 |
| 仲良く助け合い、よく働く子ども | 安心して失敗できる学校 | 多様性を受け入れられる児童を育てます | <ul style="list-style-type: none"> ふれあい月間を通し、思いやりの気持ちを育む。また、毎学期6月、11月、1月は月目標と合わせ、重点的に指導する。 「学校生活いじめアンケート」を年4回実施し、聞き取りを丁寧に行う。また、職員全体でいじめの予防や早期発見、必要な情報の共通理解に努める。 | <ul style="list-style-type: none"> 相手を思いやり、誰にでも優しく接していますか。肯定的 89.0% 何か困ったことがあったときに、誰かに相談できていますか。肯定的 86.4% | <ul style="list-style-type: none"> 学校は、子供たちが思いやりをもち、学校生活を送れるよう指導や取り組みを工夫していると思いますか。肯定的 82.3% 学校は、子供たちの理解やいじめの予防、早期発見、迅速な対応に努めていると思いますか。肯定的 61.8% | <ul style="list-style-type: none"> アンケートの結果、89%の児童、82%の保護者が子供たちは思いやりをもち過していると回答している。 一方、児童アンケートの結果「何か困ったときに誰かに相談できていますか。」の否定的な回答が14%とやや高い。 日頃から児童理解を行い、職員全体でいじめの予防や早期発見、必要な情報の共通理解に努めていますか。肯定的 90.9% | <ul style="list-style-type: none"> 引き続きふれあい月間を通して思いやりの気持ちを育めるよう指導を継続する。 年4回の「学校生活いじめアンケート」を通して、児童理解や教員間での情報の共有、いじめの予防、早期発見、迅速な対応に努める。 異学年交流やさくら学級との交流、あいさつ運動などを通し、誰にでも優しく接する気持ちや態度を育む 必要に応じて保護者ときめ細やかに学校の様子を共有し、家庭との連携に努める。 次年度に向け、いじめ発生時の対応手順マニュアルを作成した。HPIに掲載し、保護者にも具体的な対応を発信する。 | <ul style="list-style-type: none"> トラブルによっては、担任から迅速に連絡・対応策の説明があり、保護者としては安心感がもてている。 特に、「困ったときに相談する人がいない」と答えた児童に目を向けていく必要がある。スクールカウンセラーもその一人になると考えられる。進んでスクールカウンセラーに相談に行っている児童もいるが、学校も、子供たちにスクールカウンセラーの存在をもっと認識させたほうがよい。 | |
| | | 失敗を恐れず、挑戦していく児童を育てます | <ul style="list-style-type: none"> あらゆる教科や学校生活の場において、互いのよさや違いに気付き、それらを受け入れ認め合う心が育つよう指導する。 道徳や特別活動の時間を活用し、自他の生命を尊重し、人権に関わる理解と認識を深め、望ましい人間関係を育てる。 | <ul style="list-style-type: none"> 学校生活や授業の中でやらなければいけないことや決めたことを最後までやりぬくことができていると思いますか。肯定的 92.0% | <ul style="list-style-type: none"> 学校は、子供たちが互いのよさや違いを認め合えるよう指導や取り組みを工夫していると思いますか。肯定的 74.4% 学校は自他の生命を尊重し、人権に関わる理解と認識を深め、望ましい人間関係を育んでいると思いますか。肯定的 67.1% | <ul style="list-style-type: none"> アンケートの結果、決めたことを最後までやりぬいていると92%の児童が回答しており、自己肯定の高まりがうかがえる。 人権教育や望ましい人間関係の育成に関する取り組みにおいて、22%の保護者が「わからない」と回答している。感染症対策のため公開がなく、取り組みや具体的な活動が伝わりにくかったと考えられる。 | <ul style="list-style-type: none"> 学期ごとに自分なりのめあてをたて、学期末に振り返りをする活動を通して、自己の成長を見つめたり、自己肯定感を高められるようにする。 あらゆる活動の場において、振り返りや認め合いの場を意図的に設定し、互いの違いやよさを認め合えるようにする。 人権教育や望ましい人間関係の育成に関する取り組みや具体的な活動をお便りやHP、Class room等を活用し、家庭に発信していく。 学級や委員会の仕事を通して、任された仕事ややるべき仕事に責任をもち、最後まで粘り強く取り組む態度を育む。 | <ul style="list-style-type: none"> 子供たちが友達から肯定的な声をかけてもらうことが、子供の自己肯定感を高めるために重要である。そういう意味で、「意図的に」という部分が大切である。その際、一部の子供に偏るのではなく、どの子ども自己肯定感を高められるよう配慮してほしい。 | |
| 健康でたくましい子ども | 健康な心身と豊かな心情を育める学校 | 健康的な学校生活を作ります | <ul style="list-style-type: none"> 学期に1回(1週間)のパワーアップタイムを行い、体力向上を図る。(1学期:投げる、2学期:長縄、3学期:持久走)(※しかし、今年度は、活動が制限されているため、八小ワンミッツエクササイズとして、簡単にできる1分間くらいのストレッチ、体幹を鍛えるトレーニングなどを今後提案し、パワーアップタイムとリンクして取り組めるようにしていく予定。) パワーアップタイムと体カテストの種目とリンクさせて、体力向上を図り、記録を伸ばせるようにする。 6年生のミニバスケットボール大会の練習を通して、体力向上とともに、最後まで諦めず、仲間とともに優勝を目指すよう指導する。 | <ul style="list-style-type: none"> パワーアップタイムは楽しく取り組むことができましたか。肯定的 87.7% 八小ワンミッツエクササイズは、楽しく取り組むことができましたか。肯定的 80.4% (今年度の6年生のミニバスケットボール大会は、中止になりました。) | <ul style="list-style-type: none"> 学校は、パワーアップタイムや八小ワンミッツエクササイズなどの取り組みを通して、体力向上に努めていますか。肯定的 88.8% | <ul style="list-style-type: none"> パワーアップや八小ワンミッツエクササイズなどの取り組みを通して、体力向上に努めることができましたか。肯定的 86.3% 前年度の体力テストの分析結果をもとに、体力向上を意識して授業づくりをすることができましたか。肯定的 81.8% | <ul style="list-style-type: none"> PUTについて 児童…約9割の児童が「そう思う」「どちらかというと思う」を選んでいることから、主体的に取り組んでいることが分かる。 教員…体力向上に努めることができたと思う教員は85%であった。前年度の結果を基にすることができたと思う教員は、8割を超えている。このことからパワーアップタイムを毎年、体力テストの結果を受けて活動内容を決めていることがよい。 | <ul style="list-style-type: none"> パワーアップタイムは、学期に1回行う。 体育委員会や体育行事委員会と連携して、1学期に八小ワンミッツタイムを実施し、体育の授業や自宅で、年間を通して行えるようにする。 内容は、年度途中にコアティネーショントレーニングも取り入れ、実態に合わせて、新しい運動を増やしていく。(2学期:短縄、3学期:投げる・持久走) | <ul style="list-style-type: none"> コアティネーショントレーニングによって、イメージしたことを体で表現することに取り組むのはよいと思う。運動が苦手な子どももみんなと一緒に取り組めるので、効果的だと思う。全学年で取り組んでほしい。 |
| | | 心豊かな学校生活を作ります | <ul style="list-style-type: none"> たてわり班活動を通して、高学年が低学年、中学年のお手本となるように、主体的に活動できるように指導する。 地域の方やゲストティーチャーなど、いろいろな人との関わりや体験を通して、豊かな情操を育む。 オリパラ推進教育、外国語活動などを通して、日本の伝統文化、他国の多様な文化を知り、国際理解教育を進める。 | <ul style="list-style-type: none"> 異学年交流会(例年のたてわり班活動に代わる取組)では、兄弟学年で助け合ったり、楽しく遊んだりすることができましたか。肯定的 93.1% オリパラ文化プログラムや外国語活動を通して、日本の伝統文化、他国の多様な文化を知ることができましたか。肯定的 95.2% | <ul style="list-style-type: none"> 学校は、異学年交流会(例年のたてわり班活動に代わる取組)などの取組を通して、上位学年が主体的に活動できるように指導することができましたか。肯定的 86.2% 学校は、オリパラ文化プログラムや外国語活動を通して、日本の伝統文化、他国の多様な文化を知ることができましたか。肯定的 74.4% | <ul style="list-style-type: none"> 異学年交流会(例年のたてわり班活動に代わる取組)などの取組を通して、上位学年が主体的に活動できるように指導することができましたか。肯定的 100% オリパラ文化プログラムや外国語活動を活用して、日本の伝統文化、他国の多様な文化などの国際理解教育を進めることができましたか。肯定的 81.8% | <ul style="list-style-type: none"> 異学年交流について 9割以上の児童が肯定的に捉えていることから、主体的に取り組んでいることが分かる。 教員の100%が肯定的に捉えている。例年通りの活動ではないが、2学年の交流で人数が少ないため顔を覚えることができた。また、少人数であることで、相手意識が生まれたり上学年の責任感が高まったりしていた。 自己紹介カードがよかった。相手意識をもって取り組んでいた。低学年に名前や顔を覚えてもらうことで、やりがいを感じていた。 保護者の85%が肯定的に捉えている。意見として、ペアを決めたほうが、より顔を覚え親しみも生まれるのではないかと、ということがあった。 オリンピック・パラリンピック教育 <ul style="list-style-type: none"> 児童の9割以上が肯定的であった。また、教員からは、学年ごとに見ることができたことがよかった。児童の実態に合わせて興味をもてる話を聞くことができたという意見があった。 保護者の74.7%が肯定的であった。 | <ul style="list-style-type: none"> 来年度は、兄弟学年での異学年交流にさらに深まりをもたせる。例 中休みに遊ぶだけでなく、学習発表、交流の相手も兄弟学年を相手に位置付ける。 地域の方やゲストティーチャーなどは、今後も継続していく。例 むかしあそび、警察、消防署、商店、企業・校守活動、弁護士、税理士、安全マップ、議会傍聴、美術鑑賞授業など オリンピック・パラリンピック教育 <ul style="list-style-type: none"> 八小レガシーでは、しょうがい者理解を柱に進めていく。 さくら学級交流(特別活動×人権)との交流。学期初めに、全学年にオリエンテーションを行う。(「さくら学級ってどんな学級?」) 総合的な学習の時間 <ul style="list-style-type: none"> ⇒4年しょうがい者理解、5年福祉理解 withコロナの活動 3密を避けた活動に変更。 | <ul style="list-style-type: none"> 兄弟学年を決めて交流させることで、子供たちが深く関わるので教育効果が大い。学校での関りが学校外にも見られることがあり、この取り組みの結果だと思われる。 しょうがい者理解教育について、レガシーとしていくことは、子供たちの人権教育の観点からも評価できる。 |